

終戦前後の「親日派」

劉傑

はじめに

一九四〇年三月三〇日、日本軍に占領された南京に汪兆銘を首班とする新しい「国民政府」が成立した。この政府は重慶に移した蔣介石をはじめとする国民政府の合法性を否定し、「和平運動」を起こすことによって、日中戦争の解決を図ろうとした。当日に発表された「還都宣言」は、「還都以後、国内では本中央政府が唯一の合法的政府である。今後重慶側が国内に發布する法令及び外国と締結する条約は、すべて無効である」と宣告した。⁽¹⁾

しかし、このような汪兆銘政権の強硬な姿勢と裏腹に、汪兆銘グループの人々が当初から密かに重慶との連絡を維持し続けたのはなぜだろうか。これには次の理由が考えられるだろう。

第一に、たとえ日本の占領地に政権を作っても、重慶にいるのは「同胞」である。しかも、長い国民革命の歴史のなかで、ともに戦ってきた同志であり、そのつながりはそう簡単に断ち切ることはできない。俗に言う「血は水

よりも濃い」ということだろう。

第二に、蒋介石国民政府はたとえ重慶へ逃れても、その存在は依然として大きい。重慶政府との和平を実現しなければ、日中の和平はありえないとの認識は日本政府や世論のみならず、汪兆銘政権下の人々をも支配した。このまま「漢奸」で終わりたいくない汪兆銘政権の人々は各自の人脈を生かして重慶との関係を維持したのである。

第三に、占領地政権にいる同胞は、重慶政権にとって、重要な情報源であつたことも考えられる。重慶側も南京政権の人々を利用しようとしたのであろう。

特に、日本の敗色が濃くなった一九四四年以降、南京と重慶との連絡がますます頻繁になり、日本の敗戦に備えて、「漢奸」といわれた日本の協力者が各自の進路を確保するために活動を開始した。しかし、その矢先に、ある大事件が南京政権を襲う。汪兆銘の死である。

本稿は、汪兆銘の死から終戦にいたる時期における汪兆銘政権下の人々、いわゆる親日派の行動を追跡し、「漢奸」の意味を考える。

一、汪兆銘の死亡をめぐる

一九八三年頃、中国の歴史学界において、汪兆銘の死をめぐる論争が持ち上がった。論争の焦点は汪兆銘の死亡地点と死亡原因に集中した。

ことの発端は香港の雑誌「広角鏡」に掲載された霍実子の論文「太平洋戦争期のいくつかの史実を暴露する」⁽²⁾で

ある。同論文は通説を覆し、汪兆銘は名古屋帝国大学の病院で死亡したのではなく、上海虹橋病院で生涯を閉じたと主張したのである。しかも死因は病気の不治ではなく、蒋介石の命令による謀殺と言うものだから、学界に一種の緊張が走ったことも容易に推察できる。

折しも、中国大陆では抗日戦における蒋介石や国民党の役割を積極的に評価する動きが大きな盛り上がりを見せ、蒋介石をめぐる話題なら、間違いなく人々の知的関心をかき立てる時期であったから、なおさらである。

汪兆銘が重慶の国民政府を離脱して「和平運動」を開始したことに関し、蒋介石の許可を得て実現したのではないかと憶測が、昔から一般に流布した。事件発生から六〇年経った現在もその疑いは消え去らない。確かに「汪兆銘工作」は謎の多い出来事であったことは間違いない。汪兆銘の側近や関係者の一団があれだけ大がかりな脱出を敢行したのに、事前に何一つ察知されない方がむしろ不思議である。そのため、当時からこの事件は汪兆銘と蒋介石が共演した「芝居」ではないかと囁かされた。

ところで、日本に戦勝した中国人にしてみれば、戦争中日本と講和したことは紛れもなく投降主義であり、売国行為である。仮に汪兆銘と蒋介石の「共演」説が事実だとすれば、汪兆銘の和平運動は蒋介石にとって最も知られたくない暗部である。となると、蒋介石による汪兆銘「暗殺」説もそれなりの説得力をもつことになる。中国風にいえば、まさしく「殺人滅口」「死人に口なし」のような意味だろうか）に他ならない。すなわち蒋介石には汪兆銘を殺す動機を充分にもっていたのである。

さて、汪兆銘死亡説をめぐる論争の具体的内容は次のようなものであった。

先に紹介した霍実子論文は汪兆銘の死亡についておおむね次のように述べている。抗日の嵐が中国全土を吹き荒

れた一九三五年一月、「一面抵抗、一面交渉」を唱えた行政院長兼外交部長の汪兆銘が親日派の代表格と目された。抗日派の矛先が対日交渉の第一人者に向けられたこの時期に、汪兆銘狙撃事件が起こったのである。凶弾に倒れた汪兆銘は、手術の結果、一命を取り止めたが、体内に残された銃弾に起因する炎症に絶えず悩まされることになる。

ついに痛みに耐えきれなくなった汪兆銘は、治療するため、一九四二年三月飛行機で日本へ向かった。日本人医師が汪兆銘に外科手術を施し、無事に体内の銃弾を取り出した。帰国を急いだ汪兆銘はまもなく上海に戻ったが、南京に駐在する日本関係者から次のような内容の伝言を受け取った。「医師の話では、汪先生は帰国後、即仕事を再開してはいけない。最低三ヶ月程度静養しなければならない。」この伝言は秘密電報の形で日本から南京に打電したもののだが、重慶側に解読され、蒋介石に報告された。また、南京・上海にいなかった陳璧君（汪夫人）と汪兆銘との間の往復電文も技術研究室の暗号専門家李直峰に解読され、重慶側はついに汪兆銘が上海虹橋病院に入院していることを突き止めた。

一連の情報を入手した蒋介石が直ちに工作員を派遣し、虹橋病院の看護婦を買収した。そして汪に薬を飲ませるとき、密かに色も味もない慢性毒薬を少しずつ入れた。一〇月になって汪兆銘は虹橋病院で亡くなり、一ヶ月後の一月に後任の陳公博国民政府主席代理が汪の死亡を発表し、汪が日本で逝去したとして公表した。その後、汪の遺体を日本から上海に移すように装って、南京の梅花山に葬った。

以上が蒋介石による汪兆銘の「毒殺説」の概略であるが、どうやら秘密電報を解読したとされる李直峰なる人物がこの説の鍵を握っているように思われる。それでは、李直峰本人はどのように言っているのだろうか。

実は、『抗日風雲録』（一九八五年）という上海市政治協商会議文史資料工作委員会編纂の書物に「抗日戦争期の対日無線偵察工作」と題する回想録が収録されている。著者は他でもなく李直峰その人である。それによると、一九四三年一月、軍事委員会技術研究室に勤めていた軍統派の解読者楊士倫が李に次ぎのようなことを語ったことがあるという。すなわち、汪兆銘の動静を把握した蒋介石は直ちに戴笠軍統副局長に汪を殺すようにと密令した。そこで、戴笠が虹橋病院の看護婦を買収して、毎日汪が飲むはずの薬にガラス粉を入れていたので、一〇月に汪は虹橋病院で死亡した。その後、南京政府は汪が日本で死亡したと公表したのである。⁽³⁾

以上二つの記述は、事実関係をめぐって食い違いがみられるものの、蒋介石の命令による毒殺の点で一致している。蒋介石再評価の問題が中国大陸で活発に議論されたこの時期に、蒋介石と汪兆銘の関係が、歴史学界のみならず、一般の人々に広く注目されたことは言うまでもない。ところが、この一件で、最も初歩的な疑問も露呈した。誰もが認めているように、中国近代史は汪兆銘を抜きにして語れない。しかし、このような重要人物の死亡年代についてですら、敢えて新説を建てて定説に挑む人がいる。この現象は果たして何を意味しているのだろうか。

いわゆる「陰謀史観」に魅力を感じる中国人の歴史感覚もさることながら、汪兆銘工作は実に謎の多い近代史の一幕であった。ところが戦後、この歴史上の出来事に最も近い立場にいる日中両国の歴史家が研究の機会に恵まれなかったことは、謎を拡大した原因であろう。歴史事実への探究が等閑視され、その結果、謎が謎を呼び、仰天させられるような諸説は悠然と幅を利かせる空間を広げていったのではないか。

ところで、汪兆銘の「暗殺説」が誘い水となり、中国では従来タブー視されてきた人間汪兆銘及び汪兆銘政権の研究が一種のブームを形成する。いくつかの決定的な史料もその勢いで公開、紹介された。思いがけぬ成果と言え

よう。代表的なものは『周仏海日記』と『汪兆銘日記』であるが、二人の欠かせぬ政權担当者の日記が紹介されたことで、汪兆銘の死亡真相に直結する第一次史料が初めて研究者の目に触れることとなり、これにより、「暗殺説」も吹っ飛んだのである。それなりに人々の注目を集めたこの「新説」は「陰謀史観」愛好家の妄想でなければ、人々の歡心を買うためのいたずらとしか言いようがない。おそらく「暗殺説」を作り上げた人は、和平工作は蔣介石と汪兆銘の「合意」であつたということを立証しなかったのだろう。しかし、この魅力に満ちた新説はついに、汪兆銘が治療のため日本へ出発したのは一九四四年の三月三日であり、亡くなったのは同年十一月十日という定説を書き直すことはできなかった。三月三日の周仏海日記は、汪兆銘が飛び立ったときの様子を次のように綴っている。

「七時半起床。汪公館に行き、汪夫人、公博、民誼らと少し話す。九時、先に飛行場に行つて待つ。九時半、汪先生は病院の車で飛行場に着き、直ちに機内に担ぎこまれる。汪先生は余らが拱手の礼をしているのを見るが、この別れの後再会する機会があるのだろうかと思つと、暗然となつてしまう。天の助けで三ヶ月以内に健康を回復され、元氣に戻つてこられることを祈るのみ」⁽⁴⁾

文中にある公博とは、陳公博のことである。後述のように、陳は汪兆銘の重慶脱出を一旦阻止しようとしたが、周仏海と並んで、最後まで汪兆銘政權を支えた人物であつた。また、民誼とは褚民誼のこと、広東大学医学院院長や国民政府行政院秘書長の経歴をもつ彼は、汪兆銘政權のなかでも中央監察委員会常務委員兼秘書長の要職にいた重要人物である。

また、メモ風の日記を付け続けていた汪兆銘も病状の悪化とともに、一月一日から日記帳に「発熱」と記すの

みとなったのである。⁽⁵⁾

一方、汪兆銘が亡くなる数日前の周仏海の日記から、国民政府内の慌ただしさがひしひしと伝わってくる。一月八日の条に次のような内容が含まれている。

「晩、公博が来て、日本側が彼に直ぐに名古屋に行くよう要請しているので、本来は十六日に発つ予定にしていたが、本日陸軍省からの電報で、早く来るよう望んでいるので、十三日に早めて出発することにしたという。汪先生の病状が激変したのだろうか。とても心配である」

一日隔たつて、十一月十日の日記に、「日本大使館が人を遣わして通知したことによると、汪先生は今朝六時に病状が急変したとのことであり、大変憂慮する。そこで公博を訪れ、彼に早く名古屋に発つてもらうことにする」云々と書いて、事態の急変が窺われる。汪兆銘死去の第一報が日本大使館経由で南京政府にもたらされたのが死亡翌日の午後であった。周仏海はその日、「昆明から一緒にハノイに行ったときの情景を思い出し、悲愴の極みである。八月十日に名古屋でお目にかかったが、それが最後の別れになろうとは思ひもしなかった。この世のことは常ならず。悲しいかな」との思いを書き留めた。

汪兆銘の死は残された南京政府の面々に大きな衝撃を与えたことは言うまでもない。政権の中心をなくした今、新な求心力を構築することと、政権の将来像を描くことが最重要課題として浮上した。しかし当面の仕事は、亡き国民政府主席汪兆銘の葬儀を滞りなく執り行うことであった。

一二日、陳公博が国民政府主席代理に就任するとともに、みずから委員長として葬儀委員会を組織した。周仏海、褚民誼、それにかつて北京で成立した日本軍を背景とした臨時政府の主席王克敏が副委員長に就任した。

葬儀委員会は、一、各官庁、党部、軍営、軍艦、税関、学校及び公共施設において半旗を一ヶ月間掲げること、二、官僚、党員は一ヶ月間、宴会を中止すること、三、国民は一週間娯樂活動を自粛する。四、文武官僚、党員などは黒い腕章を一ヶ月間付けること、五、官庁の捺印は青色を用いること、等を決めて、追悼のムードを整えた。⁽⁶⁾

ところで、汪兆銘が東京へ治療に出発する前、「兆銘が重病に罹り、五〇日間にわたって発熱し、起きることもできない。盟邦の東条首相に遣わされた名医に診療されたが、医者は早期快復のため、場所を変えて療養すべしと主張した。今、職務を公博、仏海に代理してもらう。一日も早い回復を願っている」という内容のメモを残した。⁽⁷⁾

陳公博と周仏海の名前のところは当初、周仏海、陳公博の順であつたが、修正記号で順番を変えている。どちらの名前を先に書くかは、政府内の順位を意味するものであり、汪兆銘が倒れた現在、とりわけ重要な意味を持つ。南京政府において、陳公博は立法院長の要職にあり、地位的には二番目であつたが、しかし、周仏海は陳公博に劣らぬほどの実力派であり、両者の間は微妙な関係を維持していた。こういう状況のなかで陳公博がスムーズに主席代理に就任できたことは、汪兆銘メモが權威を保つたからであろう。ところが、陳公博が「代理」の二文字をこだわつたのはなぜだろうか。病床にいる汪兆銘の「代理」として政務を執り行うときならまだしも、すでに主席が故人となつた今、「代理」の二文字は何を意味するのだろうか。この点についても後ほど検討することにしよう。

さて、一二日午前一一時前、緊急中央政治委員会が開催され、席上、褚民誼から汪兆銘の治療経過と死亡について報告があつたあと、陳公博が国民政府令を読み上げた。それは、「国民政府汪主席が本月一〇日に逝去した。悲報が伝わり、全国が悲しみに包まれている。我が軍民は主席の遺志を継承し、この難局を思い、各自の職務に精進しなければならぬ。悪意を抱いてデマを流し、時局の攪乱を企てるものに対し、各地方の軍警が厳しく取り締ま

るべし⁽⁸⁾」という文言のものであった。汪兆銘主席への追悼の意を内外に表明したというより、民心の動揺と政局の混乱を防ぐことにアクセントがあったと評価すべき内容であった。

一九四三年一月九日、南京政府が「今日より、英米と戦争状態に入り、「友邦日本との協力に全力を投入する」と高々と英米に宣戦を布告したとき、まだ日本が太平洋洋における優勢を誇示した時期であった。しかし、日本の敗色がいよいよ濃くなった一九四四年ころ、汪兆銘をはじめとする南京政府内の人々の動揺は計り知れないものがあった。目撃者は「汪氏の心境は日増しに悪化していた。公の場で涙を流すこともしばしばであった。会議中も激動のあまり、みずからをコントロールできず、机を叩いたり、椅子を投げ飛ばしたりもした⁽⁹⁾」と回想している。

同じように、周仏海の言動も南京政府内の悲観論を象徴するものであった。「三年前のわれわれの時局認識は間違ったものだった」という発言には、過去のことを消極的に評価しがちな周仏海の性格もさることながら、数年来の和平運動への反省が盛り込まれている。さらに周仏海は「他人の軍事占領地に身を置くものとして、将来何か成果を挙げる云々はとても言えたものではない。とにかく、われわれのおかれる環境はますます艱難に満ちたものとなり、ますます対応しがたくなる。今はスタンスとか、対応策とかを口にする時期ではない。何がともあれ、われわれはただ一つの原則を守ればよい。それはすなわち、臨機応変である⁽¹⁰⁾」と側近に本音を吐露している。

このように、汪兆銘の死に衝撃を受けた南京政府内の人々が激しく動揺した。さらに、一般国民に広まっていた南京政府への不満を利用して、政局の攪乱を企む人にとって、汪兆銘の死は絶好の機会と言えよう。政府令が前述のような内容となっていたのは、このような南京政府のお台所事情を反映して、突然降りかかってくるかも知れぬ混乱を未然に防ぐためであった。

二、陳公博の「主席代理」就任をめぐる

汪兆銘が亡くなったあと、陳公博は汪兆銘が残したメモにしたがって「主席代理」に就任した。「代理」にこだわったことについて、当時多くの反対があった。なかには、代理は国体にそぐわないし、歴史や伝統にも反するというような意見や、「所詮小さな朝廷だから」等のような厳しい意見も見られた。それでも陳公博は頑としてこの代理の二字を取ろうとしなかった。

陳公博は代理にこだわったことについて次のように説明する。

民国三十三年（一九四四年）十一月一日、汪先生が逝去した。私は悲しさを堪えつつ、汪先生への私の心遣いもこれまでと思つた。ところが先生がいなくなってみると、如何にしてこの局面を收拾し、どのようにして国家の統一をはかるかが問題であつた。

南京政府は私個人の意志で解散できるものではない。すぐ解散しようとするれば日本側は必ず妨害するだろうし、南京政府にかわつて治安を維持する機関もなかった。もし下手をして東南地区で混乱をまねいた場合、国家に申し訳がないばかりか、順調に中国の統一をはかる理想も達成できなくなる。そのため私は主席に就任せずに、主席代理として現状を維持し、国家統一の機会を待つことにした。

そして一二月二〇日付で「南京の国民政府は国都を南京に復帰させて以来、終始重慶側を敵とする考えをもっていないかつた」と声明し、「党は分裂するべからず、国は必ず統一しなければならない」と強調した。私の

この声明は数年来の私の理想を示すものであった。

こう述べた陳公博はさらに、「当時の南京は依然として日本軍に抑えられていたにもかかわらず、私は、南京政府が重慶を敵とせずということを憚りなく主張した。現に南京政府自体も各党各派、無党派の人々の集まりである。私はまた、党は分裂すべからずと躊躇なく主張した。しかし、私はここで自分の勇気を云々しようとするものではない。これは八年来の私の一貫した主張であり、発言すべき時期がきたので、思い切って人々の前で明らかにしたまでである」⁽¹¹⁾と述懐し、汪兆銘の死を転機に、従来の路線を転換しようとしたことを暗示している。おそらく陳公博が最も言いたかったことは、みずからの就任は汪兆銘政権の既存路線を継承するのではなく、新しい局面を切り開くためのものであった。したがって、従来の路線の継承を意味する「主席」就任は趣旨に反するものであるから、どうしても「代理」にこだわったのだということであろう。

この陳公博の説明は、終戦後漢奸として逮捕された時点で書かれたもので、いわば自白書のようなものであるため、真実のほどは疑われても仕方がない。しかし、汪兆銘政権下で上海市食糧局長や行政院第二副秘书长などを歴任した巫蘭溪が陳公博の罪を暴く目的で書かれたものにもほぼ同じような記述が見られる。それによると、陳公博は事後巫蘭溪等に次のように解釈した。すなわち、「私が主席と称せず、主席代理と称したのは、重慶側に態度を示すためのものであった。当時、汪先生が演じたこの芝居はもはや終幕に近い。いわゆる人亡政息（人が亡くなればその政治も終わる）ということで、そろそろ終わりにしなければなるまい。私がこの厄介者（汪兆銘政権）を引き継いだのは、善後処理をするためであり、芝居を演じ続けるためではない」⁽¹²⁾

要するに、陳公博は汪兆銘の死を重慶政府に秋波を送る機会と見なし、近々到来するだろう中国の統一に備えて、

少しでも立場を有利に転換しようとしたのであろう。

陳公博は方針の転換を重慶に分かりやすくするために、「党は分裂してはならず、国は統一しなければならない」というスローガンを大々的に宣伝した。一時このスローガンは新聞や街中の壁に充滿したという。陳はこのスローガンを「新目標、新路線」と位置づけて、この新しい目標を実現するために一連の布石をおこなった。

第一の仕事は南京政権を終結させるための国民党大会の準備である。四年前、汪兆銘が政府を組織したときの手続きとしては、まず国民党の全国代表大会を開催して、その会議において新政府の設立を決めたのだから、いま、この政府に終止符を打つのも同様に党の全国代表大会を開催する必要があると陳公博が判断したのであろう。

ところが、全国代表大会と名乗る以上、各地方の党组织から参加者を集めなければならないが、かつて江蘇、浙江、江西、安徽、湖北、河南、山東、淮海の八省と南京、上海、北平、天津、漢口の五市に存在した一〇万以上とも言われる党部は今や組織として機能しているものがほとんどなく、既存の組織を基礎に全国大会を開催するのは不可能である。そこで当面の課題は党部を整頓することであった。すなわち、各地方の党部の活動を再開するとともに、党員の人数を確認するための再登録をおこない、全国大会の代表選出の規約などを整備した。

第二の布石は汪兆銘の路線を継承する宣伝を強化することであった。陳公博は公の場で、「汪先生が制定した政策は公博の守るべき政策である」と言明し、政府関係者に汪兆銘生前の方針通りに活動を継続するように求めた。⁽¹³⁾このような陳公博の態度は、内外に政権の安定を誇示するためのものと推測できよう。ところが、この時期陳公博はすでに重慶との再統一を念頭に置きながら諸政策を展開していた。このような、政権の安定を誇示する言動は、逆に重慶側を刺激し、陳公博たちにとって逆効果にならないだろうか。

これは推測であるが、南京政府側はそろそろ店を畳むことを準備し始めたが、看板倒れの実態を重慶側に知られたら、重慶との交渉や再統一の際、有利な立場を獲得することもできなくなる。そこで、本音は重慶側の心証をよくしたいのだが、「やむを得ず、再統一の道を選んだ」との印象を重慶に与えないように、敢えて虚勢を張ったのではないかと考えられる。周仏海は『中華日報』で文章を発表し、太平洋戦争中日本は海軍が殲滅されたが、空軍は依然としてかなりの実力を誇っているし、関東軍も強い戦闘力を維持していると述べた。彼によれば、日本人は民族的に「軍国主義に熱心であり」、たとえ太平洋で完全に敗北し、「日本本土での戦争が終了したあとも、中国での戦争は継続できる」というのである。

そして、南京政府がおこなった第三の布石は、共産党の勢力拡大を阻止するための軍事力の強化であった。一九四五年一月、陳公博は各地の駐屯軍を視察し、「和平反共」の方針を徹底した。そして、具体的な政策として、北の隴海から南の錢塘江までの区域を防共区域として建設し、上海、南京、杭州の三角地帯を増強する案が策定された。これらの地域への共産軍の進入を阻止するのが主な目的であったが、これもやはり重慶側との再統一に備えて進められた行動と見ることができよう。

人事面においては陳公博は大幅の調整をおこなった。陳公博は行政院長、国民政府主席代理、軍事委員会委員長の三役を兼任し、名実ともに南京政府の最高指導者の地位を占めるようになった。そして、陳公博が務めていた立法院長の地位を監察院長の梁鴻志に譲り、監察院長の席に顧忠を座らせた。また、華北政務委員会のメンバーを一新させ、立場上陳公博に近い人々が南京と華北の実権を握るにいたった。

陳公博が対重慶接近策をおこない、重慶との再統一を念頭に様々な布石を展開していたこの時期、かつてから南

京政府の将来に悲觀的な展望をもっていた周仏海も汪兆銘の死後、極度に落ち込んだ。

汪兆銘の納棺がおこなわれた四四年一月一三日、周仏海は日記に「汪先生が納棺されるので、余は病をおして国民政府に赴き、最後の遺容を瞻望したが、心が裂けんばかりである。逝きし者を悲しみ、残った者を思い、今後の苦難危機を考えると、天下が如何に大きくとも、身を置く場所がないことを感ずる」と書いて、来るべき苦難を予測している。また、一二月二二日の日記に、「大局のことを思うと、危険極まりなく、天地を覆すほどの大きな波浪がやってくるようとしており、われわれはこの驚くべき怒濤を決して乗り切ることができず、必ずや大波のために海底に沈むであろう」とあるように、彼の悲觀的な心情はもはや極限に達していた。

「CC派」のリーダーたる周仏海は、陳公博が一方的に側近を重要ポストに据えて、勢力拡大に努めていることに不満を抱いた。ただし、この南京政權は、今さら陳公博に権力闘争を挑むほど、彼にとつて魅力的なものではなくなったのかも知れない。周仏海は表面上陳公博との直接対決を極力避けようとした。彼は陳公博と違う発想で独自の方策を展開したのである。周仏海が目にしたのは、もはや陳公博に牛耳られた中央部ではなかった。彼は南京の周辺を埋めていく戦略に出たのである。なかでも特に力を入れたのは上海である。

上海は中国經濟の中心地である。重慶政權との再統一が実現した暁には、上海は中国のなかでもっとも注目される都市となることは誰の目にもはっきり映っていたことである。南京政府の金融、經濟を握ってきた周仏海にしてみれば、重慶に近づくための最良の手段は中国經濟の復興に不可欠な上海を手中に抑え、いざというときにこれを重慶側に差し出すことである。この戦略は権力闘争の荒波を乗り越えてきた周仏海の直感によって生まれたものといしか言いようがない。そこで、周仏海は上海市長に何の躊躇もなく就任し、側近の羅君強に市政府秘書長兼財政局

長の要職を確保した。そして、羅にかわって林柏生が安徽省長兼保安司令に就任した。さらに、丁黙邨を浙江省長に就任させたことは、浙江省の蒋介石故郷としての価値を周仏海は見逃さなかったであろう。

さて、「CC派」と対立した「公館派」の人たちは人事面でどのような対策をおこなったのだろうか。「公館派」はその歴史的な因縁から、広東を自派の根拠地としてきた。特に汪兆銘が亡くなった今、南京が陳公博に独占され、これに不満を感じた「公館派」は注意力を広東に移し、陳公博に対し、非協力的な態度を示すようになった。両者の関係に決定的なひびが入ったのは、陳璧君の意を受けた褚民誼が外交部長を辞任し、広東での職に就任することを言い出したことである。このように、陳公博と「公館派」との対立が急速に表面化したことで、陳公博と周仏海は対「公館派」の点で利害の一致を見だし、協議を緊密化するようになった。一九四四年一月二五日、「公館派」の重要人物褚民誼が周仏海を訪ね、「不満を大いに述べ、どうしても外交部長を辞職すると表明し、公博は何事も彼に関与させず、ただ下っ端役だけではまったく無意味である」と、陳公博に対する猛攻撃を展開した。翌二六日、今度は陳公博が周仏海を訪れ、「民誼、柏生らの彼に対する態度について話」した。周仏海も「公館派」への不満を隠さず、「憎らしくもありまた可笑しくもある。このように大局を弁えないとは誠に嘆かわしい」と日記に記した。

もっとも、陳公博と「公館派」との激しい対立は周仏海の予想外であった。一月後半、周仏海日記ではこのことについて触れない日はほとんどなかった。代表的な部分を紹介しておこう。

「最近、汪先生の直系の褚民誼、林柏生が公博に対して総攻撃をおこなっており、もし余が行政院長に就任したら、やつらが好き勝手に騒ぎ立てることであろうことは予想していたが、公博に対してはそうだとはい

誠に意外である⁽¹⁵⁾

「晩、公博、思平、心叔来訪、……余は大局を攪乱する分子に対してはしばらく忍耐し、以て大局を安定させるべきと主張する。公博も公館派に対して容認せざるを得ない苦衷があり、今後の政局はおそらく容易には⁽¹⁶⁾発展しなからう」

そして、一二月一日の周仏海日記は「公博が来て、最近の件で話すが、その憤懣があまりに多いことを知る。姑が亡くなり、嫁が一家の主になることは、実に容易なことではなく、同情すべきである」とあって、陳公博をまったく実権のなかった嫁にたとえているところは、周仏海の陳公博に対する同情というより、ライバル意識の現れとして読みとることができよう。

この褚民誼の外交部長辞任問題は、やはり最後に陳璧君がみずから広東から南京に乗り込み、陳公博に怒鳴りつけ、一件落着いたのである。四五年七月、まさに終戦直前、外交部長を辞めた褚民誼は広東省省長に就任した。南京を去り、広東省長になった理由について、褚民誼は次のように述べている。

当時、国軍の反攻と米軍の上陸の噂は南京に溢れた。広東は嶺南の要衝、革命の聖地であり、人民の物質と力は格段と豊かであった。一方の和平政府にはもはや何も期待できない。これは紛れもない事実である。しかも、救国の事業は抗戦の成功以外に道はない。南京は人々に注目されるところであり、実際に行動を起こすことは難しい。むしろ広東に移して活躍すれば、あるいはみずからの主張を実現できるかも知れない。そこで、積極的な目標と消極的な目標を自分のなかで決めた。積極的な目標とは、国軍に協力して救国の事業を完成することであり、消極的な目標とは、最善を尽くして広東を守ることである。⁽¹⁷⁾

この褚民誼の発言は戦後に書かれた自白書であり、自分の行動を正当化する部分については、一部差し引いて考えなければならぬが、少なくとも広東を拠点に南京と一線を画いて、最終局面に備えるということは事実であろう。

このように、汪兆銘の死は南京政府に大きな衝撃をもたらした。日本の勝算がほとんどなくなったこの時点、重慶による中国の再統一を視野に入れた南京政府関係者の奔走ぶりは、大きな混乱を巻き起こした。潜在していた各派閥間の対立が一気に表面化し、今や重慶政府に認めてもらうような実績を積むことが関係者の最大の関心事となった。そのためには少しでも有利な立場を獲得するように、熾烈な争いが演じられたのである。このような南京政府内の醜い内訌を評して周仏海は「これほど最終局面になってもなお暗闘を繰り広げているとは、実にどうしようもない中国人である⁽¹⁸⁾」と嘆いた。

もともと、いくら政治判断に長けた周仏海とはいえ、重慶と南京の再統一のあり方、すなわち、南京政府が如何なる形で終戦を迎えるのかということについて、自信を持って予測できるほどの天才ではなかった。しかし、「汪先生の柩が土に入るのを目にして、是非恩怨がすべて跡形もなく消え去ったように思われたのに、われわれはなぜ好きこのんであれこれ思い惑う必要があるのだろうか。汪先生に至っては、棺に蓋はされたが、その是非功罪を定めることはまだできず、今後の時局の推移を待たねばならなからう⁽¹⁹⁾」と書いているところを見ると、汪兆銘をはじめとする南京政権関係者の運命如何は、この戦争がどういう形で終結を迎えるかによって決定されることは、彼も十分に承知していたのである。

三、終戦をめぐつて

「派遣軍ハソ連ノ参戦ト共ニ全將愈々關魂ヲ振起シ驕敵撃滅ニ必死敢闘中ノ処戦争終結ニ関スル 大詔渙発アラセラレ 八月十五日正午支那戦線ニ於テ玉音ヲ拝シ奉リ御宸念ノ程唯々感泣恐懼措ク所ヲ知ラス」

以上は支那派遣軍総司令官岡村寧次が一九四五年八月一七日に作成した「軍状報告」の冒頭の部分である。

玉音放送と共に、支那派遣軍司令官は「全軍將兵ニ対シ承詔必謹關魂ヲ銷磨スルコトナク愈々嚴肅ナル軍記ノ下鉄石ノ團結ヲ堅持シ万難ヲ超克シテ新任務ノ完遂ニ邁進シ以テ御宸襟ヲ安ンシ奉ランコト」を訓示した。

続いて、「十五日夜半大命ニ基キ積極進攻作戰ノ中止ヲ命スルト共ニ、一兵ニ至ル迄光輝アル派遣軍ノ矜持ト不拔ノ信念ヲ堅持シ且沈毅自重セシムヘキ」ことを全軍に命令した。そして、翌十六日夜、「即時停戦」に関する大命が到着すると、あらゆる戦闘行動の即時停止が命令された。ここにいたり、八年間続いた日中全面戦争が終了したのである。

さて、南京政権の終戦への対応も敏速であつた。速くも八月十六日、南京国民政府中央政治委員会が臨時會議を招集し、「国民政府解散宣言」を発表するとともに、中央政治委員会を南京臨時政務委員会に、軍事委員会を治安委員会にそれぞれ改組することを決定した。日本軍の占領地域に約五年間存続した「傀儡政権」が閉幕するには、一日も必要としなかつたのである。このあつという間の変身劇に驚いた人は少なくなかつたという。

支那派遣軍側はこのような南京政府の動静に対し、大きな驚きを覚えると共に、強い警戒感を抱くようになった。

新に成立した南京臨時政務委員会は本来、支那派遣軍と協同して、日中戦争中延安を拠点にしていた共産軍の南京や上海などの主要都市への進入を防止し、これらの重要都市の安全と治安を維持し、重慶国民政府の接收を待つことが当面の課題とされていたが、しかし、前述岡村寧次総司令官の「軍状報告」によれば、「（南京政府の）要人中ニハ特ニ此ノ転機ヲ巧ニ捕捉シテ保身ヲ図ランカ為メ種々策動ヲ開始セル者アル」という。そして、軍事委員会から治安委員会に変身した人々は、「前述策動者ニ利用セラレ、南京、上海等ノ治安ヲ攪乱セントスルモノ」が現れたのである。

日本が降伏を決定した後の数日間、南京政府内で起こった変化は確かに人をびっくりさせるのに充分であった。南京政府の主席代理を務めた陳公博は、翌十七日に重慶にいる蒋介石主席に打電し、南京政府解散の決定を伝える一方、日中戦争が始まって以来、国の統一と党の大同団結を願いつづけてきたが、この宿願は本日ようやく、実現したことは、まことに喜ばしいこと、との趣旨の報告をおこなった。同じ電文のなかで、日本軍が杭州、上海、南京、徐州などに結集し、中央政府による武装解除を待ち受けていること、共産軍が日本軍の占領地域への進出を図っていること、南京政府下の軍隊が共産軍に走らないように、中央政府からの委任が期待されること、予想外の紛糾を避けるために、国軍による占領地の接收は段階を踏んでおこなうことが望ましいなどを述べた。²¹⁾ 蒋介石国民政府の南京政権に対する処置が未だ不透明な状態のもと、中央政府への服従を誓っている陳公博等南京政権担当者の姿勢は、彼らの隠せない不安を如実に映し出している。

もっとも、南京政府側が重慶側に示した「忠誠」は南京側の「片思い」ではなかったのも事実である。蒋介石は終戦早々、南京政府軍に対し、治安の維持と駐屯地移動の禁止を命令した。特に共産党指揮下の八路军と新四軍に

対し、「現地待命」を命じ、日本軍からの占領地接收を禁止した。日本との戦いに勝利した蒋介石は、中国の共産化を防ぐことを至上命題としたのである。そのため、八月一四日、重慶の国民党軍事委員会委員長侍従室は蒋介石の命令により、周仏海を軍事委員會上海行動總隊總指揮に、羅君強を副總指揮に任命して、上海市と杭州に至る地域の治安の維持をかつて「漢奸」と罵倒した人々に全権を委ねた。

同日、蒋介石は任援道を南京先遣軍司令に任命し、江蘇省と南京市付近の軍隊をその指揮下に置き、南京と蘇州周辺の治安維持にあたらせた。また、丁默邨が浙江省軍事專員に任命されたことで、浙江省と杭州市の治安が彼の維持に任された。この他、南京政権の軍事を担当する各方面軍司令官はほとんど例外なく、蒋介石に新たな肩書きを与えられ、治安維持の責任を負うことになったのである。

要するに、南京政府が豹変したのは、蒋介石の対策に起因するところが大きい。広大な土地を日本軍とその傀儡軍に占領された蒋介石国民政府にとって、全被占領地を一気に回収することを望んでいたが、しかし条件が整えるまで、南京政権を最大限に活用することもやむを得ないと判断したのだろう。それにしても、支那派遣軍の目には、終戦後の中国は、日本占領地の接收をめぐる混乱を極めたように映ったのである。岡村総司令官の報告はそのあたりのことを如実に物語っている。

重慶政府ト延安トノ相剋ハ愈々激化シ重慶ハ、派遣軍現占拠地域内ノ要域ヲ延安ニ先タチ領有スヘク焦リツツアルニ対シ、延安ハ又此ノ際極力勢力ヲ拡張センモノト猛然攻勢ニ出テ所々ニ重延正面衝突ヲ惹起シツツアリ尚重慶政府其物モ亦国際法規等ニ暗キ為カ戦闘行動停止ト共ニ接收ヲ開始シ得ルモノト解シアルカ如キ節アリテ十六日朝以來局地ニ於ケル重慶軍及ヒ日本軍小部隊ノ武装解除等ヲ実施スヘク我カ占拠地域内ニ侵入ヲ

企ツルモノ散発シアル状況ニシテ物情漸ク騒然タルモノアリ茲ニ於テ派遣軍ハ支那側ニ対シテハカカル不法ナル治安攪乱者ニ対シテハ蒋介石ノ統制下ニアサルモノト見做シ止ムヲ得ス断固タル自衛行動ニ出ツヘキコトアルヲ通告スルト共ニ隷下ニ対シテハ敵ヨリ如何ナル要求アルモ統帥系統ニ依ル命令以外ニハ絶対ニ応セサルノミナラス所要ニ応シ断乎トシテ自衛武力ヲ行使スルニ躊躇スヘカラサルヲ要求シ以テ治安ノ確保並ヒニ軍ノ撤収行動ニ遺憾ナキヲ期シツツアリ 支那ニ於ケル治安ノ不良特ニ最近ニ於ケル実相ニ鑑ミルモ派遣軍ノ撤収ニ方リテハ少クモ乗船地迄ハ絶対ニ自衛武力ヲ保持スルノ要アリ

被占领地の接収をめぐる「国際法規」云々もさることながら、蒋介石の命令がどのレベルまできちんと伝達されていたかも、まったく不明のまま、停戦態勢に入つた日本軍への攻撃準備を進める部隊もみられた。これは終戦の情報伝わりと、重慶政権と延安の共産党勢力との対立が急速に激化し、どちらも日本占拠地域の要所や交通幹線を先取しようとして、そのために日本軍の小部隊を先に武装解除しようとしたからであらう。そこで支那派遣軍は八月一七日、「中国軍隊ノ不穩行動ハ固ヨリ蔣委員長ノ命令ニ非ルベシト確信スルヲ以テ蔣委員長ハ速ニ中国軍全部ニ対シ末梢部隊ニ至ル迄即時現態勢ヲ以テスル停戦実行ヲ徹底セシメラレンコトヲ要請ス⁽²²⁾」という趣旨の通告を中国側に発したのである。

この通告が功を奏したのだろうか、八月十九日、行動総隊総指揮の肩書きに、いささか迫力の欠如を感じた周仏海は、蒋介石から行動総隊司令の称号をもぎ取り、治安維持の仕事を全面的、且つ大掛かりに展開した。八月二〇日、周仏海は次のような談話を発表した。

一、本司令部管轄区域内の各部隊は（蒋介石）委員長の許可無しに移動することや、他の部隊の改編を受けて

はならない。

二、治安維持にかかわる集会などの行動は、本司令部の許可を受けずにおこなってはいけない。

三、すでに停戦に応じている日本軍と日本人居留民に対し、侮辱と傷害を与えてはいけない。

四、人民の納税義務は引き続き履行されねばならない。理由をもうけて滞納してはいけない。

五、工場設備並びに公共の財産を壊したり、任意に売買してはいけない。

六、友軍と中央派遣の部隊はまず本司令部へ連絡しなければならない。⁽²³⁾

当日、周仏海は蒋介石に打電し、上海を完全な形で中央に返上し、一寸たりとも共産党に渡さないと意志を表明した。

蒋介石に忠誠を誓ったのは南京の周仏海等だけではなかった。広東を拠点にした公館派も極力重慶政府への服従を表明するようになった。終戦直後、褚民誼が蒋介石に打電し、広東の共産党の動向を報告する一方、部下を率いて治安の維持をおこなう意志を伝えた。これに対し蒋介石は「国父に従い、長年革命に投身してきた」と褚民誼のことを褒め称え、「心を入れ替え、広東を国民政府に渡し、広東の治安を維持できれば、寛大に対処する用意がある」と異常に寛大な態度を示した。⁽²⁴⁾

蒋介石の臨機応変な対応と周仏海等の「忠誠」があい呼応するように生まれたのは、一つは支那派遣軍からの通告があったからであり、もう一つは、いわゆる「周鎬事件」が突然勃発したからである。

八月一七日、南京政府税警団の一部が突如南京の繁華街である新街口に位置する中央儲備銀行総部の建物を占拠して、南京政府軍の武装解除と政府要員の逮捕を開始したのである。税警団は、周仏海が自派勢力の拡大を目的に

つくった軍事組織であった。この行動を直接指揮したのは周仏海の子分と言われる周鎬という人物である。当時の南京政府要員の間では、周鎬という人物について、戴笠に派遣された人間という情報以外は、ほとんど何も知られていなかったという。一九四三年頃、周仏海の推薦で彼が軍事委員会の科長に就任した。その後、無錫地域の行政専員等も歴任した。彼が突然南京で行動を開始したときの肩書きは税警局隊長であったため、この行動は周仏海と何らかの関係があつたのではないかと囁かされたのである。

南京の中心部を占拠した周鎬は、中央儲備銀行の建物いっぱい白地に赤で「蒋介石委員長万歳」と染め抜いた大きな横幕を張り、屋上から「国民政府軍前進指揮所」と書いた垂れ幕十数本を吊り下げた。また、数多くの兵力を配備し、銀行建物の周囲に土囊が積まれ、機関銃の銃座が据えられた。⁽²⁵⁾ まもなく南京市長・周学昌、前上海市長代理・呉鴻祥、南京政府宣伝部長・趙尊嶽、司法行政部長・呉頌皋といった南京政府の要人たちが次々と「漢奸」として逮捕され、この建物に連行された。一連の連行劇のなかで、南京政府陸軍部長蕭叔宣が抵抗したため銃殺されたことは、事態の深刻さを物語っている。

また、陳公博主席代理の公館も税警団の監視下にあつた。税警団は陳公博を漢奸の総本山と認識し、彼に対する処置を代行すれば、立派な手柄に違いない。ところが、陳公博が校長を務める南京軍官学校の学生軍は陳公博に対する忠誠心は揺るぎのないものであつた。たとえ漢奸と言われても、陳公博は自分たちの校長であり、軍事委員会委員長である。同学校教育長何炳賢の支持の下、ついに学生軍が陳公博公館を死守する行動に出た。学生軍の立場は「蒋介石には従うが、正体不明の怪人物には従わない」というものであつた。

このように、終戦と共に陳公博陣営と周仏海陣営は早くも激しく敵対するに至つたのである。先ほどの支那派遣

軍の布告もあり、正式に接收されるまでは、日本軍は現地の治安を維持する責任があった。そこで、今井武夫參謀次長の命令で、軍事顧問の岡田西次や參謀小笠原清中佐などが現場に駆けつけ、周鎬に対する説得工作を展開した結果、周鎬はあつてなく前進指揮所の垂れ幕を撤収し、監禁した要人を釈放した。

死者は出たものの、大事に至らなかったこの事件の背景は何だったのだろうか。周鎬と周仏海との緊密な関係は先に述べたとおりである。周仏海なら真相を知っているはずだが、多くの人に聞かれても周仏海は「知らない」の一点張りであつた。そこで、中央儲備銀行の財産が事件後紛失したこともあり、周鎬は単に金ほしさに事件を起こしたのではないかと噂されることもあつた。しかし、終戦後、漢奸に対する国民の憎しみが一気に爆発した。彼らに対する処罰の要望が高まるなか、漢奸として追及されることが免れそうもない南京政権の人々が「立功贖罪」（功績を立てることによって、罪の埋め合わせをする）の心理にかき立てられていたに違いない。正義の代弁者を演出しようとの一心で、周鎬事件のような暴走劇が上演されたのかも知れない。しかし、「治安の維持」は日本軍だけの要望ではなかつた。蔣介石も共產軍が要地に侵入することを防止するために、治安の維持を南京政権側に求めていた。事件そのものが比較的早く解決できたのは、重慶政府側と日本軍側に「治安維持」という共通認識があつたからであろう。支那派遣軍がこの難事件の解決に奮起したのは、「和平直後ノ対支施策ハ実ニ国家百年ノ大計ナルニ鑑ミ軍ハ毅然タル態度ト闘魂トヲ堅持スルト共ニ衷心ヨリ中国ノ繁榮ニ協力スルノ大乗的態度ヲ以テ対支道義ヲ実践シテ大和民族ノ真価ヲ發揮シ之ヲ以テ日支融合、東亜復興ノ為ノ鞏固ナル基礎工事タラシムルハ派遣軍ノ皇國ニ対スル重要任務ト考ヘ停戦及ヒ撤兵ニ方リテハ支那側ヲシテ秋霜ノ如キ畏怖ト敬意トヲ感セシムル如ク正々堂々ト之ヲ実行」する、という方針があつたかも知れないが、戦勝気分の人々にはもはや日本が如何なる形で

「撤兵」するかに興味はなかった。世論は「漢奸」に対する懲罰の方に傾いていたのである。

四、陳公博の亡命をめぐる

さて、この「周鎬事件」はもう一つの思わぬ事件を誘発した。南京国民政府主席代理陳公博の日本亡命事件である。

税警団に包囲された陳公博は軍官学校学生軍の保護により、難を逃れたことは先に述べた。実は、この事件前の八月一二日早朝、谷正之日本大使が陳公博公館を密かに訪問している。訪問の目的は「この際、日本に行く意志があれば、日本政府は便宜を図る」ということを陳公博に伝えるためであった。

日本がポツダム宣言の受諾を決定した直後の八月一日、東郷外相は満州、中国、タイ駐在の各日本大使にあてた電報で、日本がポツダム宣言を受諾することを内報し、三カ国の指導者のこれまでの対日協力を感謝するとともに、もし各国政府から何らかの希望があれば、報告せよと要望した。さらに「三国宣言の条件受諾にともなう大東亜諸国要人に関する措置の件」で、「要人およびその家族が、日本亡命を希望すれば、可能なかぎり世話をせよ」という趣旨のことを命じた。⁽²⁶⁾谷大使の陳公博訪問はこの政府方針を伝えるためであった。

日本側のこの特別な配慮に対し陳公博は「主席として政府関係者の安全を見届けるまで南京を離れるつもりはない」と断った。

ところが、「周鎬事件」のあと、八月二日から湖南省芷江で開かれた停戦協定準備会議に出席した今井武夫総

參謀副長は二四日、陳公博を訪ね、芷江会谈の内容を話し、特に重慶政府側から南京政府要人に対する寛大な処置の確約を得られなかったことを詫びた。⁽²⁷⁾ 今井の回想によると、芷江会谈において、彼は重慶側代表、中国陸軍總部參謀長蕭毅肅に対し、「日本側の地区に今日迄貴方の意志に叛いて日本側に協力を寄せたる貴国人あるも、彼等の今日迄の業績に対しては我方は極めて感謝しあるところなり、貴方の彼等に対する感情としては憎しみもあることとお察し致すところなるも、彼等は和平地区民衆の幸福を計り、又法権撤廃租界の回収等少からざる貢献もあり、貢献は別とするも彼等の罪は日本側の負うべきものにして彼等の今後に於ける取り扱に就ては格別寛大に願度」と要請したが、重慶側の回答を得ることができなかったという。

陳公博を前に今井武夫が述べたわびの言葉は、汪兆銘を政権の首班に推したこの「和平工作」の性格をもっとも言い表したものである。今井は言う。

「日本軍敗戦の結果、心ならずも南京政府の人々に累を及ぼした不幸な事態を、衷心遺憾とする」

南京政権を樹立した日本軍は、みずからの手で「漢奸」を生み出したことを認めたのである。そして、かれら「漢奸」に対する最後の償いをしようというのである。これに対し、「周鎬事件」の恐怖を味わった陳公博は「私は或る人の忠告で、私がこのまま南京に残っているのは、重慶国民政府の接收業務に支障となるそうだから、暫く日本に旅行したい」と申し出た。

この陳公博の要望は今井にとってもいささか意外だったに違いない。前述の通り、日本側の亡命勧誘を断ったのはつい十日ほど前のことである。何が陳公博の考えを変えたのだろうか。やはり「周鎬事件」が陳公博に与えた衝撃は大きかったのだろうか。

どうやらこの「周鎬事件」を通して陳公博は自分自身が置かれている立場を再確認したのは事実のようだ。すでに八月一三日に周仏海は重慶国民党軍事委員会に「上海行動総隊指揮」に任命されている。また任援道も南京先遣軍司令の肩書きを手に入れた。陳公博とその側近の面々が重慶側に無視された格好となったのである。陳公博はいわゆる「公館派」に近い人物である。このとき、彼は頭のなかで、「CC派」対「公館派」の争いの再燃を描いたに違いない。しかし、重慶政府の信頼を獲得した周仏海の突然の「出世」で、もはや勝負が決まったのである。

ここきて「周鎬事件」の突発である。陳公博の亡命決断は南京政府内の力関係の変化と無関係ではない。現に陳公博に同行した夫人李励莊、秘書長周隆庠、実業部長陳君慧、宣伝部長林柏生、經理總監何炳賢、秘書莫国康は、いずれも南京に残留した「公館派」の人々である。この亡命はいわば「CC派」からの逃亡である。

陳公博の希望を聞いた今井は「芷江における前日迄の会談の空気に鑑み、この際陳主席を渡日させることは、多分戦勝軍の激怒を買うだろうと考えたが、彼の最後の希望である以上、困難を冒しても必ず実現しようと心に決め、独断ながら即座に快諾した」のである。

陳公博の心情を察するに、蒋介石に直接罪を問われても、南京政府内の「CC派」の連中に捕まることは決してしたくはなかったであろう。陳公博ら亡命組を乗せた飛行機が南京の故宮飛行場を飛び立ったのは二五日未明のことであった。陳公博はみずからの渡日について「決して自分一身の危険を免れんがために亡命して、逃避したのではない。何応欽の受降業務が円滑に遂行出来るようにし度いと思った結果にすぎない」と弁明している。そして、「蒋介石宛の書簡を、何応欽に手交するよう手配済みであるから、近く南京から召還状が着く筈である」とも言って、蒋介石の命令なら服従するとの意志を明らかにしている。

ところで、問題の蔣介石宛書簡はどうなったのだろうか。今井はその回想録のなかで次のように述べている。

陳は日本に向かって南京飛行場出発の際、見送りの日本軍参謀に、蔣介石宛鉛筆書きの手書きを、何応欽に送達するように依頼したが、之れに彼の渡日の真意を述べ、決して罪を免れんとして亡命するものでないから、何時でも召還命令に従うと、書いてあった。

参謀はこの書簡の内容の重要性に気付かず、鉛筆書きの他意なき普通通信書と考え、金庫に保管したまま、匆忙の折柄失念して仕舞った。

だが、一九八一年中国国民党党史委員会が公刊した史料によると、手紙の原文は「總統府機要檔案」として台湾に保存されていることがわかった。手紙は次のような内容になっている。

南京政府解散後、度々先生に手紙を送ったが、未だに返事を受け取っていない。六年来の公博の心境は先生に察していただくところである。このたび、日本が和平を受け入れたことで、数年来の願いが一夜にして実現され、誠に喜ばしいことである。公博個人の問題については、時になれば自ら決するつもりである。先生は過去数年間、公博が罪を犯したとお思いになれば、公博は処罰に服して、国の法律を守るつもりである。もしも先生が過去数年間の出来事を不問に付し、過去を追及するおつもりが無くても、公博が将来統一の障害になるのではないかとの憂慮がありになれば、公博は先生の処罰に従うつもりである。公博が和平運動に参加したのは、汪先生が一部浅薄の人間に惑わされて、過ちを犯しているのではないかと心配したからであり、汪先生のために思い、また、国家のために思ったからである。汪先生のために犠牲した私は、国家将来のためにも犠牲する覚悟である。ただし、巷では、公博が依然として南京で自由自在に暮らしているとの噂があるため、先

生は小生の処置に困惑されているのではないかと拝察する。このたび、一時南京を去り、御命令を待つことにした。もしも先生が処罰すべきだとの考えであれば、公博は即座に自首し、裁判を待つことにしたい……⁽²⁸⁾
陳公博が南京を脱出してからまもなく、八月三〇日の『朝日新聞』は同盟電として次のようなことを報じた。

光華日報が同紙の特電として伝えるところによれば、前南京政府主席代理陳公博氏は二十八日自殺を図り重態に陥ったが、治療及ばず二十九日死亡したといわれる。

さらに新聞記事は陳公博の「自殺原因」について次のように分析した。

汪氏在世のころより表面化していた公館派、反公館派の暗闘はようやく露骨となり、この矛盾は戦争終結後八月十六日の南京政府解消、臨時政務委員会設立に際し爆発した。すなわち陳公博は一応委員長に推されたが、反公館派による中報、中央日報の乗っ取り、蕭叔宣陸軍部長の狙撃事件、南京市長周学昌、宣伝部長趙尊獄らの軟禁、陳群氏の自殺など事態はいよいよ切迫し、一方周仏海氏は重慶政府の命として上海特別行動隊司令に就任するなど、旧国民政府の実権はまったく周仏海氏の握るところとなった。

早くから汪氏の反蔣運動に従い、さらに和平救国運動の領袖であった陳公博氏はいよいよ苦境に陥ったものである。

支那駐屯軍司令部としては、陳公博の亡命を極秘にし、中国側に追及されても、知らぬ存ぜぬと突っぱねていた程であったので、蔣介石宛の陳書簡を直ちに蔣介石に渡さなかったのも当然であろう。しかし、九月九日、何応欽中国陸空軍総司令は岡村総司令官に「陳公博一行は日本に潜入していることが判明した。直ちに逮捕して中国に送還するように」と要求した。続いて九月二〇日も同じ趣旨の要望が中国側から出されたので、外務省はパニックに

陥った。陳公博の亡命工作に関わった大野勝巳が「陳公博さんがウンといってくれればいいけど、もし、いやだといった場合、日本政府としては、もうこうなった以上隠しておくわけにはいかない」と述べ、亡命工作はいよいよ限界にきていることを示唆した。

ぎりぎりの立場に追い込まれた外務省は、陳公博をはじめとする亡命組への対応策として、

- 一、何応欽メモランダムを含め、従来の重慶側との折衝経緯を詳細説明し、
- 二、特に日本政府が信義をおろそかにするものではないことを力説する。

三、結論的には日本政府の公式的な意見は、これを述べることなく、逆に陳主席の意向を引き出し、その次第

と一応決定した。⁽³⁰⁾

これに対し、亡命工作で具体的な立案と行動を指導した南京政府軍事顧問兼経済顧問補佐の小川哲雄は、「要約すれば、日本側から、中国に帰って下さいとは、とうてい言えないが、帰ってもらえば日本も助かる。何とか主席の面子を傷つけないで、帰国の雰囲気話をもちてゆきたいということである。誠に虫のよい話。もはや正面きった信義論などどこかに吹き飛んで、厳しい現実論に立った妥協が全面に出てきた」と日本政府の対応を批判する。

そこで、小川は金閣寺に隠れていた陳公博を訪ね、「帰国したいというお心は結構ですが、帰れば必ず極刑に処せられます。ここは決心のしどころだと思う。わたしは本当の亡命をおすすめています」と陳公博に直言した。⁽³¹⁾すでに陳公博の帰国の意思は堅い。というより、帰国する以外、彼に残された道はもはやない。九月二十五日、

彼は何応欽と蒋介石宛て、次のような電文を起草した。

南京何応欽総司令閣下のご高覧を願ひ、蒋介石主席閣下へのお取り次ぎを乞ふ。八月二十五日、私が南京を離れるにあたり書面一通を託し、すでにご高覧を賜わったと存ずる。数年来、鬱積していた胸中のわだかまりをおろすことができ、まことに欣快に存ずる。私はもともと南京にとどまって、処分を待つ所存であつたが、当時は私に早急に南京を離れるように勧める人もおり、私が南京にいては蒋介石先生が処置しにくくなると言つてくれた人もいた。そこで私は責任上処すべきことを片付けた上で、そこそこに南京を去つた。しかし、決して罪を逃れようとの逃避行ではなく、ご命令があり次第自首する旨をしたためたのであつた。聞くところによれば今月の九日、総司令部が私のことについて岡村寧次に覚書を送り、同二十日更に 処長がご命令の趣旨を伝えてきたとのこと、廻り廻つてやつと私のところに届いたが、帰国のうえ自首することがもともと私の念願であつたので、ご命令を待つまでもなく早急に帰りたいと存ずる。ただ、空路も海路も開通されていないため、何卒、中国機のご派遣をお取りはからひ、早く帰国して罪をつぐなえるようご配慮を賜わりたく存ずる。区々たるこの胸中を何卒ご明察のほど、お願い申し上げる次第である。陳公博。有。

敬之総司令閣下。

八月二十五日、南京を発つにあたり蒋介石先生にあてた親書一通を、貴兄及び東兄からご覧にされるように託してきたので、内容はすでにご承知のことと存ずる。私が南京を離れたのは、決して罪を逃れようとしたのではない。その頃、私が南京又は上海にとどまっていたのは蒋介石先生が処置しにくくなるといわれたから、やむを得ずそこそに南京を出て命令を待つことにした。今、承るところによれば、貴総司令部は私の帰国につ

いて岡村に覚書を送り、さらに 処長にご指示を伝えさせたとのこと、私は蔣介石先生にあてた書面の趣旨の通りに早急に帰国し、自首する所存ではあるが、一つだけ貴兄から蔣介石先生に言上して頂きたい。即ち、このたび日本に渡ったのは別に私が希望したからではなく、国内のどこに私がいてもそこには南京政府の軍隊があつて、いらざるデマを散布される恐れがあつたからである。今、蔣介石先生のご意志が判つた以上、私としては早急に帰りなく思っている。できれば中国の航空機を日本に派遣して頂き、早く帰れるよう取り計らつて頂きたい。このようなお願いは分に過ぎていくかもしれないが、区々たるこの胸中を貴兄なら深く察して頂けると存ずる。尚、今月の二十五日、私の自首について貴兄宛に電報を打ち、貴兄から蔣介石先生にしかるべき言上をお願い申し上げたが、電報の伝達に支障があるかも知れないと考え、この書簡をしたためた。何卒お取り次ぎを賜わりたく。ご機嫌よう。陳公博。九月二十五日³²

一〇月三日、李勵莊を除く亡命組六人は憲兵と兵士に護送され、C47型貨物機で米子空港を離陸した。目的地は南京である。

五、汪兆銘の墓をめぐつて

一九四六年一月、南京。

一九三七年十二月の陥落以来、この占都は、約七年半にわたつて日本の占領下に置かれた。その間、四〇年三月三〇日に「還都」の名で成立した汪兆銘を首班とする国民政府がここを首都とした。しかし、終戦とともに、重慶

に逃れていた蒋介石国民政府がふたたびこの地を掌中に収め、今やこのまちは、およそ二ヶ月前に、湖南省西部から移動してきた陸軍第七四軍の警備下にあった。軍長・邱維達指揮下の第七四軍は、南京保護のほか、善後処理の重責を担っていた。汪兆銘国民政府軍の武装解除や、日本軍及び日本人居留民の送還作業は、この部隊の手によって着々と進められていたのである。

一月一五日夜、陸軍総司令部で秘密会議が招集された。参加者は何応欽・陸軍総司令、馬超俊・南京市長、馬崇六・陸軍總部工兵指揮官、張鎮・南京憲兵司令、蕭毅爾・陸軍總部參謀長、それに邱維達・第七四軍軍長の面々であった。何応欽はまず、「蔣委員長はまもなく南京に帰還されるが、漢奸汪兆銘の墓が孫（文）総理の墓所と並ぶような形で梅花山に置かれていることは、あまりにもみつともない。委員長がこれを見たら、怒ることは必至で、それよりも、世論はどう見るだろうか」と切り出した。⁽³³⁾「漢奸」問題の解決に乗り出した蒋介石国民政府はいよいよ、地下に眠っている汪兆銘への「処置」に着手したのである。

梅花山は明孝陵南側に位置する低い山である。春先に梅の花が咲き乱れることで、この名を得たという。明孝陵と孫文の墓である中山陵への道がここを経由する。ここに汪兆銘が埋葬されたのは、わずか一年前の一九四四年一月二三日のことであった。この場所を選定したのは汪兆銘生前の意志に基づくものである。言うまでもなく、みずからの墓を孫文が眠る中山陵の近くに選んだのは、孫文の愛弟子をもって自負する汪兆銘の当たり前の選択と言えよう。ちなみに、孫文の側近として革命に従事し、孫文の死後国民党右派に暗殺された廖仲愷夫妻の墓もこの近くにある。

当初、南京政権は大規模な汪兆銘陵を計画したと言われる。陵墓は近くの中山陵をまねしてデザインされ、五千

万元をつけこむ一大建築計画であった。ところが、やっと棺を安置する部分が完成されたところに、日本の敗戦が伝わり、当初の工事計画も中断を余儀なくされた。その結果、できあがった汪兆銘の墓は比較的簡素なものであった。

予定よりだいぶ小規模なものにとどまった汪兆銘の墓には、生前、満州国皇帝溥儀から贈与された刀や、日本天皇から授与された菊花大綬章などを含む品々が遺品として埋葬された。棺の上に、国民党の党旗と青天白日旗が覆われた⁽³⁴⁾と言われる。先のような経緯もあって、汪兆銘の墓は中国歴史上の為政者の墓に比べれば、決して大がかりなものではなかった。しかし、鉄筋コンクリートで固まった墓は、かなり頑丈なものだったという。

一五日夜の秘密会議で、第七四軍に下達された命令は、この汪兆銘墓を孫文の墓から離れたところに移転することであった。命令が実際に実行されたのは一月二一日であった。

行動開始の三日前から、中山陵と明孝陵一帯は物々しい空気に包まれ、観光客や市民は一切シャットアウトされた。当日深夜、邱維達、馬崇六、馬超俊等の見守る中、百五十キロの爆薬が運ばれ、まず上部の鉄筋コンクリートの外壁が爆破され、続いて、棺桶を安置する穴も爆破で開かれた。棺桶は一年ぶりに外部の空気に接したのである。周りは異様な緊張に包まれたに違いない。棺桶を開けたときの状況について、爆破に立ち会った邱維達が次のように回想する。

蓋を開けると、遺体に青天白日旗がかけていることがわかった。汪兆銘の遺体は南京政府の文官の礼服を着用し、紺色の上着に礼帽、それに大綬という格好であった。顔は褐色になっており、所々に黒い斑点を認めることができた。遺体が綺麗な状態で保存されているのは、納棺の際防腐剤を使用したためであろう。蓋

が開けられたあと、馬崇六は関係者以外に対し墓地から離れるように命じ、馬超俊が棺内を徹底的に調べた。検査の結果、上着のポケットから長さ一〇センチ程度のメモだけが発見された。紙に筆で「魂兮歸米」の四文字が書かれていた。署名は陳璧君とあった。この紙は汪兆銘の遺体を日本から中国へ運んできたときに書かれたものという。

汪兆銘の棺を開けたり、中を調べたりしているのを見て、立ち会った邱維達は不思議に思った。彼は一五日の秘密会議で、今度の作業内容は汪兆銘墓の移転としか聞いていなかったからである。このような大げさな行動は当初予定していなかったはずである。ところが、現場の最高責任者である馬崇六が棺をトラックに乗せ、兵士に現場を元通りに修復することだけを命令して、遺体の移転先を特に指定しなかった。翌日、トラックに同行した連隊長からの報告によると、遺体はそのまま清涼山にある火葬場に運ばれ、わずか三〇分ほどで汪兆銘の遺体が灰に化したとわかったのである。あとでわかったことであるが、会議での何応欽の指示はカモフラージュであり、汪兆銘を遺体ごと抹消してしまうことこそが本当の目的だったのである。遺骨も保存されることなく野原に捨てられたという。⁽³⁵⁾

終わりに

汪兆銘の墓が爆破されたあと、梅花山の景色が一変した。汪兆銘の墓のある場所に小さな亭子（あずまや）がつくられ、山の南北に小道が造られ、花が咲き乱れていたという。ただし、汪兆銘遺体の処理問題はしばらく極秘事項とされたようである。

ここにごく単純な疑問が生じる。時は漢奸を逮捕し、大々的に処罰する真つ最中である。「大漢奸」である汪兆銘の墓を爆破して、遺骨をまき散らしても、当時の風潮のなかではむしろ正々堂々と、公にやった方が蔣介石のプラス評価につながるのである。なぜ秘密裏におこなわれたのだろうか。

この疑問を解く史料として、ここで終戦直後の八月一六日、蔣介石が軍統局長戴笠に宛てた命令書を紹介しておく。

日本はすでに無条件降伏した。精衛先生は過去、敵に身を任せ、その罪は赦せるものではない。しかし、長く国父に追随し、革命に投身したことや、すでに他界していることを考慮に入れれば、これ以上その家族に対する追究はすべきではない。まもなく我が軍隊は入城するが、軍民が怒りから、夫人等に害を加える恐れがある。汪夫人陳璧君等の安全を確保すべく、まずは安全な場所に移送せよ。以後の対応は追って命令する。⁽³⁶⁾

すなわち、汪兆銘が日本に協力したことの罪は重いが、孫文を支えた革命の功労者であることに変わりはない。しかもすでになくなっている以上、その夫人を追究しても仕方がない、という趣旨のことであろう。汪兆銘に対する蔣介石の寛大さが読みとれる。この命令書の内容が蔣介石の本当の心情であれば、汪兆銘の墓を爆破するようなことが蔣の命令でおこなわれたことは考えにくい。

ところが、この命令書は終戦直後のものである。局面の急速な変化は蔣介石の予測を遙かに越えたのであろう。国民の漢奸処罰の要望が意外と強く盛り上がったなか、「和平運動」は蔣介石と汪兆銘との「共謀」という説が、共産党側からも、逮捕された漢奸側からも噴出し、一向に収まる気配がない。たとえば、毛沢東が、投降劇は「汪精衛だけが演じているのではない。もっと深刻なのは抗日戦線の内部に隠れている張精衛や李精衛が汪精衛と内外

呼応して、共演していることである」と述べたのは、蒋介石が「紅臉」（京劇における忠臣役）を演じ、汪兆銘が「白臉」（かたき役）を演じているにすぎず、目指すところは一致していると論破しているのである。

余談であるが、『周仏海日記』の公刊で、毛沢東の共産党側も一時期汪兆銘政権側に働きかけ、共同反蔣を呼びかけたことが明るみに出たのである。一九四三年三月七日の日記にこのような記述が見られる。

筱月が来て、毛沢東が代表馮龍を密かに上海に派遣し余との面会を求めており、共産党は南京と合作して、和平統一を促進したいとのことである。予想外のことであり、再三考慮の上、原則数点を授け、接触した後再び余のところに来て報告するよう命ずる。

毛沢東側の代表馮龍は共産党所属の新四軍司令部参謀処科長の肩書きを持つ情報活動家である。この人物が周仏海との接触を試みたことは実に興味深い出来事である。さらに、翌八日の周仏海日記にも驚くべき内容が書かれている。

六時に筱月が馮龍を連れてやってきたので、対外和平、対内統一の大義を告げ、国際情勢を分析して、英、米はソ連と永久に合作することはず、日ソが提携して英米に立ち向かう日もあるかも知れぬ、という。彼は、上海に来たのは毛沢東の命令によるもので、このことを知っているのは最上部の三、四人のみで、余に会えて非常に嬉しく、直ちに延安に戻って報告すると述べ、一時間ほど話して帰った。そのねらいがどこにあるのか、推測は難しいが、一方で渡り合い、もう一方でその発展を監視するものとする。公博もこのことを非常に注目し、馮と会談することを了承した。

共産党からの働きかけは、その後の周仏海日記に出てこないの、共産党と南京政権との正式の接触はこのとき

だけかも知れない。また、共産党や毛沢東がどれだけ本気だったのかということもはや知る由はない。共産党による政治謀略の可能性は否定できないが、蒋介石を国内の最大の敵と位置づけていたことは間違いない。

さて、話を戻そう。先ほど、蒋介石と汪兆銘の共謀ではないかとの憶測が後を絶たない、と書いたが、漢奸と言われた人たちの自白書にもこのような記述が数多くみられる。一例を挙げれば、褚民誼がその自白書に次のように書いている。

（和平運動が始まった）当時、蔣委員長と汪先生との間で役割分担の約束がなされていたとの噂が盛んに伝えられた。すなわち、抗戦の役目は蔣委員長が担当し、和平工作は汪先生が担当するというのである。抗戦が勝利すれば、和平路線も自然に解消し、抗戦が失敗しても和平路線で戦争を終結させることができる。汪先生から直接聞いた話だが、蔣委員長と和平運動について語ったとき、蔣委員長の方から、抗戦は易しいことで、和平こそ難しい仕事だと言われたことがあるという。汪先生も『君為其易、我任其難（君が易しいことを為し、私が難しいことに任ずる）』と言ったことがある。したがって、私は終始、汪先生の和平運動は少なくとも蔣委員長の了解を得ていると信じて疑わなかった。

一方、たとえ噂とはいえ、蒋介石はこのような声をまったく無視するわけにもいかない。終戦直後に執筆した汪兆銘問題に関する命令書と、国民から噴き出された漢奸懲罰の要望に挟まれ、蒋介石は難しい選択を迫られたのである。漢奸政権との関係が噂されるなか、同政権とはなんら関係もないことを内外に表明する一方、南京政権内の一部の人間との微妙なつながりを問題として取り上げられることを阻止しなければならぬ。そのために、汪兆銘の墓が特別にクローズアップされない方がもっとも望ましい。この墓を残してしまえば、いずれはそれについて明確

な態度を表さなければなるまい。いわば、時限爆弾のようなものを抱えてしまうことになる。これを静かに除去した方が上策だったのであろう。

また、こういう推測も成り立つ。すなわち、重慶国民政府が勝利した今、汪兆銘政権は漢奸政権に間違いなが、しかし、汪兆銘は孫文直系の弟子、清王朝を倒した革命家というもう一つの顔をもつ。したがって、国民政府が南京へ凱旋した今、漢奸の墓をこの都に残すわけにはいかない。だが、角度を変えれば、革命家の墓を公に破壊することも難しい。とりわけ、蒋介石と汪兆銘の長年にわたる軋轢は誰もが知っている事実であり、この個人の恩怨が墓を壊した原因と一般に解釈されても、蒋介石としては困る。こういう視点から考えても、いつの間にか、知らないうちに汪兆銘の墓がなくなった、というのが一番理想的ではなからうか。

すなわち、終戦を迎えたいま、身の処し方をあれこれと考えていたのは、「漢奸」と罵倒された人々だけではない。抗日の英雄蒋介石も身辺整理を開始したのだらう。

注

- (1) 『中華日報』一九四〇年三月二日付。
- (2) 香港『広角鏡』一九八三年九月十六日。
- (3) 蔡德金「汪精衛死亡の真相」(『歴史評論』一九八八年六月号)、七八頁。
- (4) 蔡德金編、劉傑等訳『周仏海日記』(みすず書房、一九九二年)、一九四四年三月三日条。
- (5) 「汪兆銘日記」の真偽についても論争が持ち上がったことがある。日記が本当に存在することを論証するために北京師範大学の蔡德金教授が特別に論文を執筆している(劉傑訳「汪精衛日記の真偽について」『日本歴史』一九八九年三月号)。日記偽造説の真意は定かではないが、「汪兆銘日記」の原本を所蔵している上海市档案馆が一九四〇年分のものを機関誌『档案と歴史』に

公開しただけで中断した。連載打ち切りを余儀なくされた本当の理由は明らかにされていないが、どうやら日記の真偽をめぐる論議が巣つていたようにも思われる。ちなみに、連載を打ち切ったときの編集部の弁も、日記の信憑性を強調しながらも、「明らかにできない理由」により中断せざるを得なかったと述べただけである。したがって、汪兆銘日記の全貌は未だに公にされていない。ただ、現在上海市档案馆に保存されている日記は一九四〇年一月から四四年一月までのものは確かである。

(6) 中華民國三十三年十一月十七日『國民政府公報』（中國第二歷史檔案館編、江蘇古籍出版社、一九九一年）。

(7) 金雄白『汪政權實錄』（香港春秋雜誌社、一九六一年）、一〇二、永別了這半壁破碎河山」所収。

(8) 前掲『國民政府公報』第七一八／七一九合併号。

(9) 前掲『汪政權實錄』。

(10) 南京第二歷史檔案館所蔵『汪兆銘政權檔案資料』所収。

(11) 陳公博「八年來の回顧」（南京市答案館編『審訊汪偽漢奸筆錄』上、江蘇古籍出版社、一九九一年）。なお、講談社出版の松本重治監修、岡田西次訳『中國國民黨秘史』に一部誤訳があるので、それを修正した。

(12) 巫蘭溪『汪偽政府末日記』（黃美真編『偽廷幽影錄』、中國文史出版社、一九九一年）三三三—三三五頁。

(13) 前掲『汪政權實錄』。

(14) 前掲『周仏海日記』、一九四四年一月二五日条。

(15) 同右、一九四四年一月二八日条。

(16) 同右、一九四四年一月三〇日条。

(17) 褚民誼「參加和運自述」（前掲『審訊汪偽漢奸筆錄』）二八一頁。

(18) 前掲『周仏海日記』一九四四年一月二三日条。

(19) 同右。

(20) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書・昭和二〇年の支那派遣軍』二（朝雲出版）。

(21) 中國國民黨中央委員會党史委員會『中華民國重要史料初編——対日抗戰時期』第六編、『傀儡組織』（四）、一九八一年、一五五—一五五二頁。

(22) 前掲『昭和二〇年の支那派遣軍』。

- (23) 『中央日報』一九四五年八月二〇日付。
- (24) 前掲、「汪偽政府档案」。
- (25) 益井康一『漢奸裁判史』（みすず書房、一九七七年）一八二—一頁。
- (26) 同右、三四頁。
- (27) 今井武夫『支那事変の回想』（みすず書房、一九六四年）二二七—三三八頁。
- (28) 前掲、『中華民国重要史料初編』一五五—五頁。
- (29) 『昭和史の天皇』一四（読売新聞社、一九七二年）三八—一頁。
- (30) 小川哲雄『日中終戦史話』（原書房、一九八五年）一七九頁。
- (31) 前掲、『昭和史の天皇』三八四頁。
- (32) 前掲、『日中終戦史話』一八二頁。
- (33) 邱維達『蒋介石秘密炸汪墳』（『文史資料選輯』第一八輯所収）。
- (34) 『中華日報』一九四四年一月二四日付。
- (35) 蔡德金『汪精衛評伝』（四川人民出版社、一九八八年、四八二頁）。
- (36) 前掲褚民誼「参加和平運動自叙」。

（本稿は早稲田大学特定課題研究助成費による成果の一部である。）